

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 25 日現在

機関番号：21201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20823

研究課題名(和文) 認知行動療法を活用した精神看護学シミュレーション教育のメタ認知への効果

研究課題名(英文) The effect on the meta-cognition of the psychiatric nursing simulation education which utilized cognitive-behavioral therapy

研究代表者

佐藤 史教 (SATO, FUMINORI)

岩手県立大学・看護学部・講師

研究者番号：20554976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：認知行動療法に基づく精神看護学シミュレーション教育を実施し、不安尺度やメタ認知尺度を用いて質問紙調査を行った。対象者はA大学看護学部3年生90名とした。模擬患者は臨地実習指導者に依頼した。学生は演習の前に各自で目標を設定し、演習後には目標に対する達成度とその理由、演習で学んだこと、できるようになったことなどについて自己評価を行った。介入前後で不安は有意に減少しており、メタ認知はモニタリング機能のみであったが向上が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知行動療法に基づく精神看護学シミュレーション教育によって、看護学生の精神疾患をもつ人への否定的なイメージや関わる上での不安感の軽減につながる。また、本研究を通して、学生が講義や演習で獲得した態度と知識・技能を生かすために不可欠とされるメタ認知の育成につながる一助が得られた。今回得られた成果を踏まえ、認知行動療法に基づく精神看護学シミュレーション教育を構築することにより、看護学生の効果的な学習につながるるとともに、精神看護学領域以外の他領域における看護学教育にも活用が可能であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：I conducted a mental nursing simulation education based on cognitive behavior therapy, and conducted a questionnaire survey using the anxiety and metacognition scales. The subjects were 90 third-grade students at the A university nursing department. The simulated patients were asked to practice instructors. Before the exercise, students set their own goals, and after the exercise they made a self-assessment of the achievement of the goal and the reason, what they learned in the exercise and what they could do. Anxiety decreased significantly before and after the intervention. The metacognition was improved only by monitoring function.

研究分野：精神看護

キーワード：シミュレーション教育 認知行動療法 メタ認知 不安

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

文部科学省(2011)と厚生労働省(2011)は、看護基礎教育における看護実践能力の育成を課題として挙げている。

精神看護における看護実践能力としては、看護師自身が道具となり、コミュニケーション技術を活用して患者の状態をアセスメントしたり、治療的な関わりが必要となることから、コミュニケーション技術の向上が求められる。山本ら(2013)は、OSCE(Objective Structured Clinical Examination)などのシミュレーションを取り入れた精神看護の教育に取り組み、自信の獲得などポジティブな評価が得られたことを報告しており、精神看護学教育においても看護実践能力の育成への取り組みが始まっている。

しかし、精神疾患をもつ人に対する看護学生の認知は、不安や恐れなど否定的なイメージを抱く事が先行研究から明らかとなっており、効果的な学習の障壁となっている。木浪ら(2008)や伊東ら(2005)は学生に対しあらかじめ講義による情報伝達を行ったが、精神疾患・精神疾患をもつ人に対する認知に大きな変化が見られず、偏った視点を持ったままだと報告している。このように、精神疾患に対する認知を変化させることは、従来の方法では限界があることが明確となっている。

このような背景から、研究者は精神看護学実習における不安軽減を目的とした認知行動療法に基づく実習オリエンテーションを開発し(佐藤, 2015)、看護学生に実施した結果、状態不安の軽減だけでなく、特性不安の軽減にも効果が得られた。今後、さらに学習効果を上げるためにメタ認知の育成が必要と考える。メタ認知とは、「この問題に関して自分はどのようなことを知っているのか」「さらにどのようなことを知る必要があるのか」「どのような方略を自分は知っているのか」「この場合どのように思考(行動)したらいいのか」などの高次の認知過程である。学生が講義や演習で獲得した態度と知識・技能を生かすために、メタ認知の育成が不可欠(松崎, 2004)と言われている。吉田(2010)は看護過程の演習においてメタ認知を意識した「気づきと学び」記録による振り返りを加え、成果としての記録をポートフォリオとし俯瞰できるようにした結果、学生の理解度が高まったことを報告している。

2. 研究の目的

看護学生に対して認知行動療法を活用した精神看護学シミュレーション教育を実施し、メタ認知への効果を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 平成 28 年度実施内容

平成 28 年度は模擬患者を用いた看護過程の演習を実施し、看護学生の不安の軽減とメタ認知への効果を検討した。

対象

A 大学 看護学部 3 年生 90 名

本研究について説明を受け、同意が得られた者

実施期間

平成 28 年 4 月から平成 28 年 8 月

質問紙調査実施時期は、演習の実施直前と直後とした。

構成

「精神臨床看護論」の講義の中で、認知行動療法で用いられる自動思考記録表を用いて「自己を知る」講義とグループワーク、模擬患者を用いた看護過程の演習、模擬患者を用いた様々な症状への対応(「妄想のある患者」「拒否的な患者」「希死念慮のある患者」の 3 回)を実施した。

看護過程の演習内容

講義・グループワーク:「自己を知る」

演習:病室に見立てた部屋に模擬患者を配置し、コミュニケーションを通して情報収集を行いながら、看護過程を展開したり、様々な症状への対応を行った。

模擬患者:臨地実習指導者に依頼する。事前に打ち合わせを重ね、模擬患者間で差異がないようにした。

学生は演習の前に各自で目標を設定し、演習後には目標に対する達成度とその理由、演習で学んだこと、できるようになったことなど自己評価を記載した。

演習中は iPad を使い動画撮影を行い、講義終了後に自己学習できるようにした。

データ収集方法

質問紙調査

各講義や演習の前後に質問紙調査を実施した。

・成人用メタ認知尺度

・演習を通しての感想(自由記載)

・STAI 状態 - 特性不安検査:状態不安 20 項目(4 件法), 特性不安 20 項目(4 件法)

分析方法

質的分析

自由記述の内容については内容分析を行った。

量的分析

演習前後の尺度得点について t 検定を行い、メタ認知と不安軽減への効果を検討した。

(2) 平成 29 年度及び 30 年度実施内容

対象

A 大学 看護学部 3 年生 90 名

本研究について説明を受け、同意が得られた者

実施期間

平成 29 年 4 月から平成 29 年 8 月

質問紙調査実施時期は、演習の実施直前と直後とした

構成

「精神臨床看護論」の講義の中で、認知行動療法で用いられる自動思考記録表を用いて「自己を知る」講義とグループワーク、模擬患者を用いた看護過程の演習、模擬患者を用いた様々な症状への対応（「妄想のある患者」「拒否的な患者」「希死念慮のある患者」の 3 回）についての演習を実施した。

看護過程の演習内容

講義・グループワーク：「自己を知る」

演習：病室に見立てた部屋に模擬患者を配置し、コミュニケーションを通して情報収集を行いながら、看護過程を展開したり、様々な症状への対応を行った。

模擬患者：臨地実習指導者に依頼する。事前に打ち合わせを重ね、模擬患者間で差異がないようにした。

学生は演習の前に各自で目標を設定し、演習後には目標に対する達成度とその理由、演習で学んだこと、できるようになったことなど自己評価を記載した。

演習中は iPad を使い動画撮影を行い、講義終了後に自己学習できるようにした。

データ収集方法

質問紙調査

各講義や演習の前後に質問紙調査を実施した。

- ・成人用メタ認知尺度

- ・演習を通しての感想（自由記載）

- ・STAI 状態 - 特性不安検査：状態不安 20 項目（4 件法）、特性不安 20 項目（4 件法）

分析方法

質的分析

自由記述の内容については内容分析を行った。

量的分析

演習前後の尺度得点について t 検定を行い、メタ認知と不安軽減への効果を検討した。

倫理的配慮

演習は講義の一環として行うため、全員に実施するが、質問紙の回答は自由意思とする。質問紙は無記名で、対象者が同意する場合、対象者自ら封をした上で、A 大学 看護学部を設置された箱に投函する。研究者の所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。

4. 研究成果

平成 28 年度及び 29 年度はプレテストに該当するため、主に 30 年度の研究成果について報告する。

研究初年にあたる平成 28 年度は、プレテストとして認知行動療法に基づく精神看護学シミュレーション教育（模擬患者を用いた様々な症状への対応の演習 3 回）を実施し、その前後に質問紙調査を実施した。対象者は A 大学 看護学部 3 年生とした。演習は講義の一環として行うため、全員に実施したが、質問紙の回答は自由意思とした。また、質問紙は無記名で、対象者が同意する場合、対象者自ら封をした上で、A 大学に設置された箱に投函を依頼した。研究者の所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。

演習では、病室に見立てた部屋に模擬患者を配置し、コミュニケーションを通して情報収集を行いながら、看護過程を展開したり、様々な症状への対応を行わせた。模擬患者は臨地実習指導者に依頼し、事前に打ち合わせを重ね、模擬患者間で差異がないようにした。学生は演習の前に各自で目標を設定し、演習後には目標に対する達成度とその理由、演習で学んだこと、できるようになったことなど自己評価を行った。質問紙調査は、成人用メタ認知尺度、演習を通しての感想（自由記述）、POMS2 (Profile of Mood States Second Edition) を用いて演習前後に記載を依頼した。対象者のうち、55 名から回答が得られた。分析は、SPSS23.0J for Windows を使用し、演習前後の値について Wilcoxon の符号付順位和検定をした。POMS2 では演習前後で不安感の軽減が見られたが、メタ認知尺度ではメタ認知の向上が見られなかった。本結果を踏まえて、平成 29 年度及び 30 年度の介入方法を修正することとした。修正点は、演習進度を緩やかにする、講義前に演習における目標の設定、講義後に振り返りを行うことのできるワークシートの作成の 2 点である。

平成 29 年度は認知行動療法に基づく精神看護学シミュレーション教育(講義・グループワークによる「自己を知る」, 模擬患者を用いた様々な症状への対応の演習 3 回, 全 4 回)を実施し, 質問紙調査を行った。対象者は A 大学 看護学部 3 年生とした。演習は講義の一環として行うため, 全員に実施したが, 質問紙の回答は自由意思とした。また, 質問紙は無記名で, 対象者が同意する場合, 対象者自ら封をした上で, A 大学に設置された箱に投函を依頼した。演習では, 病室に見立てた部屋に模擬患者を配置し, コミュニケーションを通して情報収集を行いながら, 看護過程を展開したり, 様々な症状への対応を行わせた。模擬患者は臨地実習指導者に依頼し, 事前に打ち合わせを重ね, 模擬患者間で差異がないようにした。学生は演習の前に各自で目標を設定し, 演習後には目標に対する達成度とその理由, 演習で学んだこと, できるようになったことなど自己評価を行った。

平成 30 年度は認知行動療法に基づく精神看護学シミュレーション教育(講義・グループワークによる「自己を知る」, 模擬患者を用いた様々な症状への対応の演習 3 回, (全 4 回)を実施し, 不安尺度やメタ認知尺度を用いて質問紙調査を行った。対象者は A 大学 看護学部 3 年生 90 名とした。演習は講義の一環として行うため, 全員に実施したが, 質問紙の回答は自由意思とした。また, 質問紙は無記名で, 対象者が同意する場合, 対象者自ら封をした上で, A 大学に設置された箱に投函を依頼した。演習では, 病室に見立てた部屋に模擬患者を配置し, コミュニケーションを通して情報収集を行いながら, 看護過程を展開したり, 様々な症状への対応を行わせた。模擬患者は臨地実習指導者に依頼し, 事前に打ち合わせを重ね, 模擬患者間で差異がないようにした。本年度模擬患者を行う臨地実習指導者は, 3 年以上継続して模擬患者を行っており, より熟練していた。学生は演習の前に各自で目標を設定し, 演習後には目標に対する達成度とその理由, 演習で学んだこと, できるようになったことなど自己評価を行った。本年度は演習進度を緩やかにし, 演習における目標の設定, 講義後に振り返りを行うことのできるワークシートの作成を行った。

様々な症状への対応の演習 3 回目前後で調査した質問紙の結果について述べる。質問紙の有効回答数は 77 (有効回答率 85.6%) であった。

STAI の状態不安の平均値は, 介入前は 44.0 ± 12.1 , 介入後は 41.1 ± 13.6 であり, $t(76)=2.9$, $p<0.005$ と有意に減少していた。特性不安の平均値は, 介入前は 46.6 ± 12.3 , 介入後は 44.6 ± 14.3 であり, $t(76)=2.2$, $p<0.05$ と有意に減少していた。以上の結果より, 本介入は看護学生の状態不安, 特性不安とともに減少させる効果があると考えられる。演習を行い, 正のフィードバックを他者から得られることで自分の関わりに自信を持つことができ, 不安の軽減につながったと考える。

メタ認知尺度はモニタリング, コントロール, メタ認知的知識の 3 つの下位項目からなる。モニタリングの平均値は, 介入前は 31.9 ± 13.0 , 介入後は 36.4 ± 14.6 であり, $t(76)=2.4$, $p<0.05$ と有意に増加していた。コントロールの平均値は, 介入前は 30.9 ± 13.4 , 介入後は 31.5 ± 12.9 であり, 微増しているが, 有意差は見られなかった。メタ認知的知識の平均値は, 介入前は 29.2 ± 11.5 , 介入後は 29.3 ± 11.3 であり, 有意差は見られなかった。メタ認知尺度の総得点の平均値は, 介入前は 92.0 ± 37.0 , 介入後は 97.2 ± 37.9 であり, 有意差は見られなかった。以上の結果より, 本介入はメタ認知のモニタリングは向上させる可能性があるが, 他の点においては影響を与えることがないと考えられる。モニタリングは課題遂行中から課題終了後までの認知活動について自らを振り返り, チェックと評価を通して省察的にモニタリングをする機能である。演習開始時に目標を設定したこと, 講義後に振り返りを行うことのできるワークシートを用いたことでモニタリング機能の向上につながったと考える。一方で, 行きつ戻りつ計画や方略を修正し, より良く課題を達成しようと自らの認知活動をコントロールしようとするコントロール機能や, 方略についての知識や人間についての知識そして課題についての知識に関するメタ認知的知識には本介入の成果は見られなかった。これは, 演習の進め方を時間時間で全体で統一して進めたためと, 対応の仕方を調べながら考える時間がなかったためと考える。少人数グループで個々のペースに合わせて演習を進めたり, 演習の合間に文献等を調べながら知識を深めていく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

なし

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

なし

6．研究組織

研究者個人で行った．

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。